

春近し

2024. 2. 28

まもなく弥生3月である。福島では、春の香りがしてきている。この春の訪れというものは、土地によってだいぶ異なる。

2月上旬、出張で東京に行ったことがある。福島は、まだまだ冬である。当たり前のようにコートを着ていった。新幹線が東京駅に着く。いつものように迷わないように慎重に出口を探し、外に出る。「あれっ、空気が違う」すでに、福島の3月上旬の陽気である。コートを着ながら歩いていると暑い。コートは大きな荷物へと変わる。そして、また新幹線に乗り、福島に戻る。いつものように寂しげな福島駅に着く。外に出る。「寒い」コートなしではいられない。春から冬に戻る。

単身赴任で二度ほど会津に住んだ。南会津では、雪も積もるが、気温が低かった。マイナス16度、今まで経験したことがない世界だった。ある晴れた朝だった。空気がきれいだった。空気中にキラキラと光る小さな粒のようなものが見える。ダイヤモンドダストである。土地の人に教えてもらったことがある。ここは、北海道と同じだと。4月の入学式の頃になると、ようやく春らしくなってくる。明らかに、福島で迎える春とは違った。

奥会津では、気温も低い、雪の量が違った。雪の降り方が違う。雪国である。町の除雪体制は見事だった。夜中の2時頃から除雪車が動き出す。その腕がいい。ギリギリのラインで除雪をしていく。朝、町の人たちが活動を始める頃には、除雪は完了している。町にとって、除雪は生命線である。奥会津の春は遅い。4月中旬くらいになると、ようやく春めいてくる。桜が咲くのは、5月の大型連休の頃である。

南会津でも奥会津でも、土地の人たちは、冬を受け入れている。気温の低さも雪の量も、決して拒絶はしていない。ここで生きていくというのは、寒さも雪も当たり前のように生活の一部にするということである。冬に対する覚悟が違う。

春が訪れる。待望の春である。福島にいと、春がやってくるのは当たり前のもので、年中行事の一つになっている。だが、南会津や奥会津では、当たりの春ではない。今年もようやく春になった。春を迎える心持が違ふ。長く厳しい冬とともに歩んできたからこその春である。毎年、春の景色には、大きな変化はないだろう。だが、人々の心の中には、毎年、違ふ春が訪れているのではなからうか。南会津や奥会津では、冬も春も特別な季節なのである。

わずか5年ほど暮らしたからといって、何がわかるというのだろうか。私の言っていることは、的外れなのかもしれない。だが、4つの季節のうち、冬と春が特別に思えたのは確かである。福島では、春近しだが、南会津や奥会津では、まだまだ春は遠い。しばらくすると、今年も一味違った春がやってくるのだろうか。そこには、春という季節の本当のよさがあるように思う。